岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第140号（2009）33－41

教員の資料活用力向上を目指した社会科授業力開発研修プログラムに関する研究

桑原　敏典

本研究は，社会科教師の授業力を向上させるための研修の原理の解明と，実際の具体的なプログラムの開発を，授業力のうち資料の有効な活用のために必要な力に重点をおいて行おうとしたものである。社会科の授業構成において，児童生徒に授業の中で実際に配布し彼らの思考や考えを触発する資料の役割は極めて大きいが，実際には教師自身の誤解や力量不足のために本来の役割を果たすことができていない場合も多い。しかし，一方で，そのような力の育成は，経験を積んで得られるものであって研修を通して獲得するものではないという考えもあり，なかなか計画的には育成できないでいる。本研究では，そのような固定観念を取り払って，実際に研修等で利用できる形のプログラムを開発した。

Keywords：社会科授業力，資料活用，教員研修

Ⅰ．はじめに

本研究は，社会科授業において，資料，特にデジタル化されたものを有効に活用するための知識や技能を身につけることを目指した，教員研修のためのプログラムの原理と方法を提案しようとするものである。

社会科において，資料は，児童・生徒に学習への意欲・興味を持たせ，主体的に考え判断するための素材を提供する授業に不可欠な要素の一つである。一般に，優れた授業実践と言われるものでは，児童・生徒の興味をひきつけ，思考を促す資料が提示されうまく活用されていることが多く，資料活用の力が授業の面白さを左右していると言っても過言ではない。しかしながら，どのような資料を選択すべきなのか，それをどのように活用すべきなのかといった学習指導に関する知識や技能は，名人と言われる教師やベテラン教師の長年の経験に裏付けられていることが多く，一般の教師に広がっていったり伝えられたりすることは少ない。また，一方では，そのようなものは自ら見出すものであり，他者から教わるものではないといった頑なな考え方も教師文化の中に見られ，社会科教師全体の授業力の底上げが図りにくい状況がある。本研究は，そのような，所謂，教材開発・授業開発のコツと呼ばれるものを学問的に明らかにして，それらを意図的計画的に身につけさせる教員研修のあり方を明らかにする研究の中に位置づけられるものである。

本研究では，特に資料活用のための知識・技能の中でも，デジタル化された資料活用のスキルに焦点をあて，それを効果的に習得するための原理と方法を明らかにしていく。

Ⅱ．社会科教師の授業力―資料活用に焦点化して―

1．求められる社会科授業力の構想

社会科教師に求められる授業力とは，授業の計画から，実施，反省にいたる全ての段階で必要とされる能力である。資料有効活用に関しても，当然これらすべての段階において必要とされる能力を想定できるはずである。

資料を授業において有効に活用する力という観点から考えれば，それは，適切な資料を選択し，加工し，それを使って授業を組み立て，実践し，実践を振りかえって改善する力ということになろう。本研究においては，具体的には以下のような力を設定した。

岡山大学大学院教育学研究科社会・言語教育学系　700－8530　岡山市津島中３－１－１

Developing the Program for the Social Studies Teacher Training focused on How to Use Teaching Materials.

Toshinori KUWABARA
Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1, Tsushima-naka, Okayama 700-8530

① 授業を計画する段階
ア．資料が何かを適切に把握し，どのような資料が必要かについて見通しを持つことができる。
イ．どこに，どのような資料があるかを把握している。
ウ．様々な資料を解釈し，意味づけることができる。
エ．アの見通しに基づいて，解釈した資料を評価できる。
オ．適切な資料を選択し，授業の中に配置することができる。
カ．配置した資料について，発問や学習課題を設定することができる。
② 授業を実践する段階
ア．資料を，児童・生徒が読み取り易い形で提示することができる。
イ．資料の読み取りが困難な児童・生徒に対して適切な支援ができる。
ウ．資料に関する発問に対する児童・生徒の回答を整理しまとめて授業を展開できる。
③ 授業を評価する段階
ア．児童・生徒が資料を適切に読み取ることができたかどうかを評価できる。
イ．適切に読み取ることができなかった場合に，その原因を探ることができる。
ウ．資料についての児童・生徒の意見が適切に処理できたかどうかを評価できる。
④ 授業を改善する段階
ア．資料が適切でなかった場合に，どのような資料が必要か見通しを持つことができる。
イ．資料についてより適切な発問や課題を考案することができる。
ウ．資料をより適切な形に加工したり，提示の仕方を変えることができる。

これらの力の中でも，計画段階が最も重要であると考えられる。なぜなら，そもそも社会科授業において資料がどのような役割を果たしており，どのような意味があるかということは，授業構成自体と密接に関係しており，授業を構成することは資料をいかに配置するかということと切り離しては考えられないからである[1]。

そこで，本研究においても，この計画段階で育成すべきアからカの力を育成することを主に目指してプログラムの開発を行った。アは，資料そのものに対する理解に関わる項目である。この力には，資料の意味や役割とともに，資料を有効に活用した授業構成の理論とその方法についての理解を含んでいる。イは，資料の入手に関する知識とスキルである。入手先からそのアクセスの方法などを含んでいる。ウは，入手した資料の内容理解に関する項目である。その資料が意味しているものについて，ただそれが示しているものだけではなく，そのものの社会的背景に迫り，社会諸科学の成果をふまえながら解釈し，研究上そして現代社会における意味を解明する力である。エは，そのように意味づけた資料の価値を評価し，授業で活用できるかどうかを判断する力である。活用できるか否かの見極めは，児童生徒にとって興味深いものであるか，既に持っている知識や経験を使って理解できるものであるか，疑問を発見できるものであるかといった観点が考えられよう。そして，オは，授業構成に合わせて資料を適切に選択し，授業過程の中に位置づける力である。そして，カは，配置した資料を使って実際にどのような指導を行い，学習活動を指示するかを構想する力である。本研究で開発するプログラムにおいては，計画段階の授業力育成に重点をおくことから，最終的にはこのカの力の開発を目標とする。そのため，カにむけて，アからオの力を段階的に育成するようにプログラムを構成していくことになる。

2．授業力開発の観点からみた現職教師の問題

研修は，強制されるものではなく本来は教師自身が自らの問題意識に基づいて受講し，積極的に取り組んでいくものであろう。そのような条件のもとでこそ，はじめて研修の目的が十全に達成されるはずである。しかし，現実には，それを妨げる様々な要因が存在する。中でも，現職教師が経験の中で形成してきた授業に対する偏った考え方は，彼らの研修に取り組む意欲を低下させ，効果を半減しているように思われる。必ずしも全ての教師がこのような考え方を持っているわけではないが，ここ数年，筆者が関わった現職教師対象の研修をふまえると，程度の差はあっても，多くの社会科教師が，次の三点の考え方を持っていると推測されるのである。

1）資料は，児童・生徒の興味や関心をひくためのものであり，学習意欲の喚起が目的である。そのため，身近で珍しいものが求められ，授業の導入段階で提示されなければならない。
2）絵や写真，データといった事実を表わす資料は単純であり児童・生徒の思考を促すことは難しいが，構造や仕組みを表わしている図や表は複雑で深い思考を促すことができる。
3）資料は，児童・生徒が教科書に書かれている教育内容を理解するための具体的な手掛かりとなるものであって，抽象的な概念や理論を把握するための手段である。

1は，最もよく耳にする考え方である。児童生徒は身近なものに興味を持つため，授業では身近なものを導入部において資料として提示し，学習意欲を喚起しなければならないというものである。歴史で

あれば，児童生徒が住む地域に縁のある事物が示され，地理や公民であれば彼らの生活に密着したものが取り上げられて示されることになる。この場合，資料は導入部で数分から十数分活用されるものの，そこで使命を終えて，あとの授業展開との直接的なつながりは持たない。そのため，示された資料は児童生徒の記憶に残るが，授業内容それ自体とは関連付けられず，肝心の授業内容も深まらないという問題が生じる。

2は，資料をできるだけ活用し，授業に児童生徒を積極的に巻き込んでいこうとする，授業改善に向けて意欲的な教師に見られる考えである。このような教師は，自分なりにどのような資料が活用できるかについての見通しを経験から身につけている。そして，それは，事実をそのまま表している絵や写真，データなどの資料は授業で教える内容について，児童生徒が実際に確かめるためのものであり，事実を解釈し構造化した図や表は，児童生徒の思考を促し理解を深めるためのものであるというものである。しかし，実際には，後者は資料の範疇に入れることは難しい。教科書の本文ではないという意味では資料と言えるかもしれないが，前者の資料とは明らかに性格が異なっている。厳密に言えば，実際の学習指導の中では資料として児童生徒に提示されるものかもしれないが，授業構成においては概念図または分析表という位置づけになり，資料としては位置づけられないのである。そして，それらは，一見児童生徒の思考を促すかのように見えるが，実際には，図表として示された構造や過程にそった見方や考え方をさせているのであって，自発的自主的な思考や判断を促しているわけではないのである。

3は，授業の中で児童生徒が考え理解すべきものは教科書に記載されている教育内容であり，それを具体的に理解させるための手段として資料があるという考え方である。このような考え方に基づく授業においては，資料は教師の説明の後，説明内容を確認するためのものとして提示される。そのため，資料は児童生徒の思考や判断を触発するものとはならない。

これらの三つの考え方では，それぞれ資料に対するとらえ方が異なっている。1は，資料とは実物または現実をしめすものであると考えている。そして，2の考え方は，資料とは教科書に書かれている本文以外のもの全てであるとものである。また，3は，資料とは，抽象的な教育内容を具体化し事実に近づけたものという考え方に基づいている。1は，資料の意味を最も狭くとらえる考え方であるが，この場合，資料を用いて児童・生徒の興味や関心をひくことはできるが，深い思考を促すことは難しい。なぜなら，実物や現実そのものを解釈するためには，高度な見方や考え方が必要であり，それを身につけていないと，現実はただ「面白い」もので終わってしまうからである。また，2は，資料の意味を最も広く捉える考え方である。この考え方は，授業構成における資料の役割を把握していないものである。すなわち，絵や写真，データなど考える手がかりを与えるものと，図や表など考えた結果を示すものを全て資料として捉えているのである。後者は，結論であり授業の到達目標である。それ自体を疑い，検討することは児童・生徒にとっては不可能である。したがって，資料自体の考え方としては3が最も適切であると言えよう。しかし，3の考え方は，教育内容と資料の関係を捉えそこなっている。教育内容が目的で資料が手段であるならば，資料は確認のための素材となってしまい，児童生徒は飽くまで抽象的なレベルで思考判断しなければならない。教育内容と資料の関係はむしろ逆であろう。すなわち，資料について児童生徒が疑問を持ち解釈することが授業の目的であり，そのための手段が教科書の本文に書かれている教育内容ではないだろうか。このように考えることで，児童生徒が自ら考え判断する授業構成と資料の有効活用が関連付けられ，授業自体の改善につながっていくのである。

Ⅲ．デジタルコンテンツ活用のための授業力

1．デジタル化された資料の特徴の理解

本研究においては，インターネットを通して入手可能なデジタル化された資料の活用のための授業力育成に重点をおいている[2)]。デジタル化された資料を活用するための能力としては，以下のような力を設定した。

（1）デジタル化された資料に対する理解。
（2）デジタル化された資料と，教科書等に掲載されているものをはじめとする紙媒体資料の違いへの理解。
（3）デジタル化された資料の特徴の理解。

（1）は，デジタル化された資料自体がどのようなものであるかということに関するものである。そこには入手先といった実践的な事柄から，特徴やメリット，デメリットといったデジタル化された資料の本質に関するものまでの項目を含んでいる。列挙すると以下のようになろう。

① 入手できるところ：博物館，歴史資料館などの社会教育施設。大学や図書館。
② 入手のし方：インターネットからダウンロード。ＤＶＤやＣＤ－ＲＯＭとして購入。
③ デジタル化された資料の特質
ア）種類が多様である（教科書や資料集には掲載できないようなものがある）。
イ）一つの資料の情報量が多い（色，細かさなど）。
ウ）操作可能である（画面上で操作ができる）。
④ デジタル化された資料と教科書や資料集の資料を比較した場合の，前者のメリット，デメリット
○メリット
• 様々な形で提示することができる（プロジェクターで提示，印刷して配布，各自がＰＣの画面上で閲覧などの選択肢がある）。
• 関連する資料を見つけ易い（ＨＰなどでリンクが張られている場合）。
○デメリット
• 利用する側で二次的に加工することが困難である（ＰＣの画面上で提示する場合は，提示の仕方を提供者の意図によって制約される）。
• 利用場所がハード面の条件によって制約される（場合によっては，インターネットに接続されていなければならないため利用場所が制限される）。

②のデジタル化された資料の特質としては，第一に種類が豊富であることを挙げることができよう。教科書や資料集に掲載できる資料は限られており，また，大きさや色などが制限されるため，実際の姿形を紙面上に再現することも難しい。また，教科書や資料集以外の文献などから資料を取り出し，授業で提示しようとしてもできない場合もあろう（例えば，公開されていない建造物や文献など）。しかし，現在では博物館や歴史資料館が，自らが所蔵している貴重な資料をデジタル化して保存するようになっている。そして，それらの中にはインターネット上で閲覧できるようになっているものもある。それらを丹念に探していけば，教科書や資料集にはない貴重なものを授業で活用することができるのである。また，デジタル化された資料は，モニター上で見る時に様々に操作して分析できるようになっていることも多い。拡大や縮小はもちろんのこと，立体であれば角度を変えたり，あるいは関連する事物へのリンクが張られたりしていたら検索も容易である。これらは，資料を使って児童生徒が自らの疑問に基づいて探究を行う際に非常に役立つ機能である。

以上のような特徴をもつデジタル化された資料にも，④で挙げたようなデメリットがある。第一は，所有する側が設定している条件をこえて利用する側が二次的に加工することができない点である。場合によってはコピーや保存が困難なこともあり得る。また，ハード面の条件によって利用場所が制限され，それが十分でない場合は活用できないこともデメリットとして挙げることができる。

２．デジタル化された資料の活用上の留意点

博物館や歴史資料館が所有しているデジタル化された資料の中には，教育活用に目的を特化し児童生徒が利用しやすいように加工されたものもある。それらの中には，ＨＰ上で利用できるものもあれば，ＣＤ－ＲＯＭやＤＶＤという形で入手できるものもある。しかし，それらの学習用の資料が授業においても活用できるかと言えば，必ずしもそうではない。むしろ，授業では利用しにくい場合が多い。

まず，そのような学習用のデジタル化資料の特徴に関しては，以下のような点を挙げることができる。

ア）ゲーム感覚で学習ができ，児童・生徒が興味をもって取り組むことができる工夫がされている。
イ）一定のルートがあり，それに沿って知識を習得していくことができるようになっている。
ウ）考えさせるよりも，興味や関心を持たせることに重点がおかれており，珍しさや面白さを優先して資料が選択されている。
エ）児童・生徒が一人でも学習できるように比較的易しい内容で構成されている。
オ）一回性のものであって，何度もやり直したり，じっくりと時間をかけて取り組むものにはなっていない。

このような資料の目的は，児童生徒に興味を持たせ，実際に博物館や歴史資料館を訪ねてもらうことであるため，内容は易しく導入的なものにとどまっていることが多い。そして，面白さの追究に重点をおいているためエンターテイメント性は高いが，学術的は，深まりは不十分である。

また，一次資料のデジタル化資料と学習用のデジタル化資料の違いとしては，以下の三点を指摘できよう。

ア）一次資料のデジタル化資料は，貴重性は高いが難解なものが多く，その内容は児童・生徒にとって高度である。
イ）学習用のデジタル化資料は内容も児童・生徒が取り組みやすいようなものに限定されており易しいが，一定の決まったルートの学習にしか活用できない。また，ほとんどが事実的な知識に関するものである。

ウ）一次資料のデジタル化資料は情報量が多く様々な事実を読み取らせることができるが，学習用のデジタル化資料は情報量が少なく，それを使って考えたり判断させたりするには不向きである。

デジタル化された一次資料は教育目的だけではなく，研究も含む幅広い用途に活用されることを想定しているが，学習用の資料は教育目的に限定されているため，以上のような違いが生じると考えられる。学習用のデジタル化資料は，児童生徒が一人で学ぶものとして作成されていることが多く，そのため，迷ったり躓いたりして先へ進むことが困難になるような構成にはなっていない。楽しみながら，次々に新しい知識を習得できるようなものになっているのである。

授業で実際に活用できるのは情報量の多い一次資料をデジタル化した資料であろう。確かに，このような形の資料の活用にあたっては，教師自身がそれに関する十分な知識を持っていることが求められる。しかし，授業という集団で取り組む学習の場には，あらかじめルートが設定されている学習用のデジタル化資料は不向きではなかろうか。一次資料をデジタル化した資料の利用上の留意点については，以下のような項目が考えられる。

ア）読めない文字などについてはあらかじめ資料提供者に尋ねて明らかにしておくこと。
イ）どうしても不明な部分がある場合は，資料を読み取らせるにあたって視点や角度を限定して，児童・生徒に利用させるようにすること。
ウ）資料についての解説や関連する資料の充実している施設のものを利用すること。

以上のような，デジタル化された資料の特徴をふまえて，それを使い児童生徒に自ら考え判断させるような授業を開発するための力を育成する教員研修プログラムを開発した。プログラムの概要については次章で説明することにしよう。

Ⅳ．研修プログラムの実際

1．プログラム開発の方針

本研究で開発を目指すプログラムは，大学や教育センター等で行われる半日程度の研修で活用できるものである。対象とする教師については，小学校から高等学校まで特に学校段階は制限しない。ただ，そのため，ベテラン又は社会科の授業づくりについて既にかなりの力を持っている教師が，その力をさらに伸ばすためのものではなく，むしろ，あまり社会科を得意としない又は社会科を専門とするが教育法についてはまだ十分な知識を持っていない教師が授業改善を目指して受講するものを志向している。

以上の点をふまえて，開発の基本方針を以下の5点とした。

① 2～3時間の半日研修に活用できるプログラムとする。
② 研修者用のマニュアルと受講生用のワークシートの作成。
③ 講義と演習をセットにした研修。
④ 指導者の一方的な説明にならない，具体的な授業事例に則した講義。
⑤ 個別の取り組みとグループ活動を交えた演習。

2．プログラムの概要

プログラムは大きく前半と後半に分かれ，以下のような構成になっている。

1．所要時間約180分
（前半：80分，後半：100分）
2．構　　成
前半「社会科授業における資料の意味と役割」（講義中心）
資料に対して，受講者がすでに持っている考え方を振り返りながら，資料の意味と役割について理解させる。さらに，資料を活用した授業とはどのようなものか，そのためには授業構成に対する考え方をどのように転換しなければならないかについて考察させる。

後半「デジタル化された資料を使った授業づくり」（演習中心）
デジタル化された資料とはどのようなものかを理解させたうえで，その活用方法を説明する。そのうえで，デジタル化された資料を用いてどのような授業づくりが可能かを考えさせる。授業づくりとはいえ，研修時間内に一つの授業を完成させることは困難であるので，特定の資料について児童・生徒に対する課題と学習活動を考案することを目指す。

このように，資料活用と授業構成についての基本的な認識を確認する前半と，デジタル化された資料に特化して，その活用の仕方を，実際に具体的な資料を取り上げて課題に取り組ませながら習得させていく後半からプログラムは構成されている。

プログラムの詳細については，後に掲載している研修担当者用マニュアルによって示していくことにする。ここでは紙幅の都合から概要のみを示すこととする。

研修プログラム１「社会科授業における資料の意味と役割」の概要
プログラム１―①「これまで，資料をどのように使ってきましたか？」(15分)
社会科授業における資料の意味や役割について，研修受講者の現時点の考え方を確認するとともに，これまでの授業を振り返らせる。
プログラム１―②「資料とは何ですか？」(15分)
児童・生徒が考えたり判断したりするための資料とはどのようなものかを理解する。
プログラム１―③「資料はなぜ必要なのですか？」(20分)
授業の中で資料がどのように活用されることが望ましいのかを考える。
プログラム１―④「資料を有効に活用した授業とはどのようなものですか？」(30分)
資料を有効に活用した授業構成とはどのようなものか，そこでは授業はどのような役割を果たしているかを考える。
研修プログラム２「デジタル化された資料を使った授業づくり」の概要
プログラム２―①「デジタル化された資料とは？」(20分)
デジタル化された資料とはどのようなものか，教科書や資料集の資料とどのような点に違いがあるかを理解する。
プログラム２―②「デジタル化された資料にはどのようなものがあるか？」(20分)
デジタル化された資料にはどのようなものがあり，どのようなものであれば社会科授業で活用できるかを理解する。
プログラム２―③「デジタル化された資料を使ってどのような授業ができるか？」(60分)
デジタル化された資料について，授業での活用方法を考える。

プログラム１では，資料そのものの理解という基本的な内容から入っていくが，そこでは教科書を見て，教科書に掲載されている本文と本分以外の要素を分析し，その関係を検討しながら，資料とは何か，授業で児童生徒の思考や判断を促す資料とはどのようなものかを考えさせる[3]。その後，実際に資料を有効に活用し，発問や学習課題を多く取り入れた授業の指導案を提示して，資料の授業の中での配置や問の設定の仕方について検討させていく。

プログラム２では，デジタル化された資料の特質について，具体的な資料を提示しながら検討させた後に，それらを使った授業づくりの演習を行う。実際には限られた時間で授業を作成することは困難であるので，本研究においては，資料を使ってどのような問い又は学習課題を設定できるかを考案させる演習に取り組ませることとした。

このように，講義と演習を組み合わせた研修プログラムによって，教師は，資料の活用の仕方を授業づくりの基盤に立ちかえって考え，検討しなおすことができるはずである。そして，単なる指導技法の習得ではなく，授業構成の原理についての理解も深まるであろう。

Ⅴ．おわりに―今後の課題―

本研究で開発したプログラムは，筆者がこれまで直接見たり，話を聞いたりして捉えた優れた教師の営みを一般化して仮説として設定した教師の授業力に基づいて作成されている。それは，経験に基づいているとはいえ，一般にも通用するものと考えているが，今後は，さらに理論的に根拠づけその妥当性を強化する必要がある。また，提示した研修マニュアルの形態についても，筆者の経験に基づく所が大きいが，今後は，これを実際に活用してもらうなどして，使い易さをさらに追求していきたいと考えている。

また，教員免許更新制度の講習などにおいては，受講者の評価をすることになっており，また，受講者が研修自体を評価することにもなっている。そのため研修の成果の評価方法と評価の基準や，教員研修プログラムの妥当性や有効性を図る方法についても今後検討が必要である。

[注]

1）森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書，1978年，pp.162－163.
2）インターネットの社会科授業への利用については，岡明秀忠「インターネットを活用した社会科授業」社会認識教育学会編『社会認識教育の構造改革―ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発』明治図書，2006年，pp.204－214がある。
3）このような手法は，久山将弘「資料を読み解くことで社会的な見方や考え方を育てる中学校社会科の授業づくり」岡山県総合教育センター『研究紀要』第１号，2008年，pp.25－42にも見られる。

資料を効果的に活用した授業づくりのための研修プログラム
―デジタル化された資料活用編―
（研修担当者用マニュアル）

《 研 修 の 前 に 》

1．本研修の目的

社会科の授業を，知識の一方的な注入に終わるものではなく児童・生徒が積極的に自ら考え判断するものへと改善していくためには，考え判断するための材料である資料を効果的に用いることが必要である。多くの教師がこの点には同意するものの，実際にそのような授業を作ることは困難である。その理由の一つとしては，資料の授業における意味や役割に対する教師の誤解がある。また，資料といっても文字で書かれたものから，数値で表されたデータ，絵，写真など様々であり，それらの特性を教師が十分に理解していないことも問題である。本研修は，教師の持つそのような資料の役割に対する誤解と資料そのものに対する誤解を解き，授業の改善に役立つ資料を選択して，授業の中に適切に配置し活用するための知識と方法の習得を目的とするものである。

本研修では，手に入れることができる様々な資料の中でも，インターネットのＨＰから，またはＤＶＤやＣＤ－ＲＯＭとして入手できるデジタル化された資料に焦点をあて，それらを有効に活用した授業づくりができるようになることを目指している。本研修のプログラムでは，具体的には，資料に基づいて児童・生徒に対してどのような課題を与え学習に取り組ませるかを考案することを目標とする。

2．研修の進め方

本研修の概要は以下の通りである。

1．所要時間　　約180分（前半：80分，後半：100分）

2．構　　成

前半「社会科授業における資料の意味と役割」（講義）

資料に対して，受講者がすでに持っている考え方を振り返りながら，資料の意味と役割について理解させる。さらに，資料を活用した授業とはどのようなものか，そのためには授業構成に対する考え方をどのように転換しなければならないかについて考察させる。

後半「デジタル化された資料を使った授業づくり」（演習）

デジタル化された資料とはどのようなものかを理解させたうえで，その活用方法を説明する。そのうえで，デジタル化された資料を用いてどのような授業づくりが可能かを考えさせる。授業づくりとはいえ，研修時間内に一つの授業を完成させることは困難であるので，特定の資料について児童・生徒に対する課題と学習活動を考案することを目指す。

Ⅱ．研修プログラム１「社会科授業における資料の意味と役割」

≪プログラム１の概要≫

プログラム１―①「これまで，資料をどのように使ってきましたか？」

社会科授業における資料の意味や役割について，研修受講者の現時点の考え方を確認するとともに，これまでの授業を振り返らせる。

プログラム１―②「資料とは何ですか？」

児童・生徒が考えたり判断したりするための資料とはどのようなものかを理解する。

プログラム１―③「資料はなぜ必要なのですか？」

授業の中で資料がどのように活用されることが望ましいのかを考える。

プログラム１―④「資料を有効に活用した授業とはどのようなものですか？」

資料を有効に活用した授業構成とはどのようなものか，そこでは授業はどのような役割を果たしているかを考える。

プログラム１―①「これまで，資料をどのように使ってきましたか？」（15分）

（1）目的

このパートでは，受講者のレベルを指導者が把握することが重要である。

a．受講者が社会科授業における資料の役割をどのように考えているかを把握する。

b．受講者がこれまで授業の中で資料をどのように活用してきたかを把握する。

c．資料が有効に活用できている授業とは，それを用いて児童・生徒に考えたり判断させたりすることができた授業であることを確認させる。

（2）展開

① 受講者に対して次のことを尋ねる。

「社会科の授業において，資料はなぜ必要なのでしょうか」…ア）

「授業の中で資料をうまく使えたと思った時のことを話して下さい」…イ）

② アとイの問いに対する受講者の回答を整理する。

③ 資料をうまく活用できた時とは，資料を用いて児童・生徒に考えたり判断させたりするときであることを確認し，そのような授業を作ることが本研修のねらいであることを伝える。

（3）指導上の留意点

このパートでは，受講者に問題意識を持たせ課題を明確にさせなければならない。イに対する回答を詳しく見ていくことで，目標のｃを導き出せることが望ましい。

プログラム１―②「資料とは何ですか？」（15分）

（1）目的

このパートでは，活用可能な有効な資料とはどのようなものかを理解させる。

a．教科書や資料集に掲載されている「資料」を，考える素材となるものと考えた結果を表すものに区別させる。

b．授業において児童・生徒の思考や判断を促す資料とは，事実を示すもの（絵，写真，データ，文書等）であることを理解させる。

（2）展開
① 絵，写真，データ，図などが豊富に掲載されている教科書のページを示し，資料を分類させる。
② 資料を絵，写真，データ等の事実そのものを示すものと，図や表など事象の仕組みや構造を概念的に表わしたものに区分し，前者は考えるための素材となるものであるのに対して，後者は考えた結果を表わしたものであることを理解させる。
③ ②の資料のうち，後者は前者について考える際の見方・考え方となるものであることを理解させる。
（3）指導上の留意点
このパートでは，授業で使われることが最も多いと思われる教科書や資料集に掲載されている様々な「資料」に対する認識を見直させることが重要である。一方的に説明するのではなく，教科書や資料集に掲載されている資料をこれまでどのように使用してきたかを振り返らせながら展開することが望ましい。

プログラム１―③「資料はなぜ必要なのですか？」（20分）

（1）目的
このパートでは，資料が授業において児童・生徒の社会認識形成上どのような役割を果たしているかを理解させる。
a．教科書記述に含まれる様々な知識には，具体的なものから抽象的なものまで質の異なるものがあることを理解させる。
b．抽象的な知識はより具体的な知識を説明するための手段となるものであることを理解させる。

（2）展開
① 具体的なものから抽象的なものまで知識が階層構造をなしていることを説明する。
② 教科書の本文を読み，より具体的な知識とより抽象的な知識を区別させる。
③ 教科書の本文の記述に対して，周辺に掲載されているどの資料が最も関連があるかを問う。そのうえでそれらの対応関係を把握させる。
④ 社会科で獲得すべきは抽象的で，様々な具体的な知識の説明に利用できる知識であり，それらを表している図や表は授業の到達目標であることを把握させる。しかし，それ自体を暗記させることが目的ではなく，それを用いて具体的な知識を説明できて初めて目標が達成されることを理解させる。
⑤ 資料の説明ができるようになることが授業の目的であり，資料はそのために必要であることを理解させる。

（3）指導上の留意点
このパートの内容は，まさに抽象的で理解し難いものであるので教科書を用いて具体的に説明していかなければならない。できるだけ，その教科書を使って授業をしている状況をイメージさせながら進めていくことが重要である。

プログラム１―④「資料を有効に活用した授業とはどのようなものですか？」（30分）

（1）目的
このパートでは，実際に資料が授業でどのように用いられるかを考えさせることが目指される。
a．資料を活用して児童・生徒に考え判断させる授業は，問いを中心に構成されることを理解させる。
b．問いを中心に構成される授業は，一つのメインクエスチョンを中心としてサブクエスチョンに答えながらメインアンサーに到達するものであることを理解させる。
c．問いを中心に構成される授業において，資料は，メインクエスチョンを構成するため，さらにはその答えに対する予想を確かめるために必要とされることを理解させる。

（2）展開
① 問いを中心に構成されている授業の指導案を提示し，授業の展開を読み取らせる。
② 授業のねらいを把握させたうえで，メインクエスチョンとメインアンサーを確認し，授業がメインクエスチョンの答えを探究する過程であることを理解させる。
③ サブクエスチョンは，メインクエスチョンに対する児童・生徒の予想を確かめるためのものであることと確認する。
④ 授業の中で資料が何のために，どのように活用されているかを確認させる。
⑤ 資料がメインクエスチョンを構成するためと，それに対する予想を確かめるために設定されていることを理解させる。
⑥ 授業で有効に活用できる資料の条件として，次の二つの条件があることを理解させる。
　i）児童・生徒の持っている認識との間，またはそれ自体があらわす事実の中に問題や矛盾を含むものであること。
　ii）児童・生徒が事実を確認したり，自分の考えを確かめたりする手助けとなるものであること。
⑦ 授業で資料を有効に活用するためには，次の二点に留意することを理解させる。
　i）授業の中心となる資料，メインクエスチョンに対応した資料は，導入部の最後に位置づけられ，他の資料はメインクエスチョンに対する予想が示された後に配置される。
　ii）資料は，必ず問いに対する答えを見出すための手段であるので，資料を使用する際には，まず，資料から事実を読み取らせる問いを設定し，その次にその事実同上の関係を読み取らせる問いを設定する。

（3）指導上の留意点
このパートは，指導案を中心に展開する。指導案をしっかりと読み取らせ，展開を十分に把握させておくことが必要である。さらに，授業で発せられる問いには，「いかに」，「何」，「なぜ」があり，「なぜ」が中心となることを追加で説明してもよい。

Ⅲ．研修プログラム２「デジタル化された資料を使った授業づくり」

≪プログラム２の概要≫

プログラム２―①「デジタル化された資料とは？」（20分）
デジタル化された資料とはどのようなものか，教科書や資料集の資料とどのような点に違いがあるかを理解する。

プログラム２―②「デジタル化された資料にはどのようなものがあるか？」（20分）
デジタル化された資料にはどのようなものがあり，どのようなものであれば社会科授業で活用できるかを理解する。

プログラム２―③「デジタル化された資料を使ってどのような授業ができるか？」（60分）
デジタル化された資料について，授業での活用方法を考える。

プログラム２―①「デジタル化された資料とは？」

（1）目的
このパートでは，デジタル化された資料の特質を把握させる。
a．デジタル化された資料はどこで，どのようにして手に入れることができるかを理解する。

b．デジタル化された資料は，教科書や資料集に掲載されている資料と違ってどのような特徴，メリット，デメリットがあるかを理解する。

（2）展開

① デジタル化された資料の具体例を示し，そこから何が読み取れるかを問う。

② 提示した資料について説明をしたうえで，デジタル化された資料はどこで，どのようにすれば入手できるかを説明する。

- 入手できるところ：博物館，歴史資料館などの社会教育施設。大学や図書館。
- 入手のし方：インターネットからダウンロード。ＤＶＤやＣＤ－ＲＯＭとして購入。

③ デジタル化された資料の特質としてどのような点を挙げることができるかを問う。

ア）種類が多様である（教科書や資料集には掲載できないようなものがある）。

イ）一つの資料の情報量が多い（色，細かさなど）。

ウ）操作可能である（画面上で操作ができる）。

④ デジタル化された資料と教科書や資料集の資料を比較して，デジタル化された資料のメリットやデメリットについて考察させる。

○メリット

- 様々な形で提示することができる（プロジェクターで提示，印刷して配布，各自がＰＣの画面上で閲覧などの選択肢がある）。
- 関連する資料を見つけ易い（ＨＰなどでリンクが張られている場合）。

○デメリット

- 利用する側で二次的に加工することが困難である（ＰＣの画面上で提示する場合は，提示の仕方を提供者の意図によって制約される）。
- 利用場所がハード面の条件によって制約される（場合によっては，インターネットに接続されていなければならないため利用場所が制限される）。

（3）指導上の留意点

実際にインターネット上で様々な資料を紹介しながら解説することが望ましい。もし，それが不可能であれば，ＤＶＤなどの資料を用意する。

プログラム２－②「デジタル化された資料にはどのようなものがあるか？」

（1）目的

このパートでは，デジタル化された資料の中で，どのようなものであれば社会科授業で有効に活用できるかを明らかにしていく。

a．デジタル化された資料には，一次資料をただデジタル化しただけのものと，学習用に教育的加工を施したものがあることを理解する。

b．両者にはそれぞれメリット，デメリットがあるが，授業で有効に活用できるのは前者であることを理解する。

（2）展開

① 学習用に教育的加工をしたデジタル化資料を提示し，実際に使ってみせる。

② 学習用のデジタル化資料の特徴について考察させる。

ア）ゲーム感覚で学習ができ，児童・生徒が興味をもって取り組むことができる工夫がされている。

イ）一定のルートがあり，それに沿って知識を習得していくことができるようになっている。

ウ）考えさせるよりも，興味や関心を持たせることに重点がおかれており，珍しさや面白さを優先して資料が選択されている。

エ）児童・生徒が一人でも学習できるように比較的易しい内容で構成されている。

オ）一回性のものであって，何度もやり直したり，じっくりと時間をかけて取り組むものにはなっていない。

③ 一次資料のデジタル化資料と，学習用のデジタル化資料の違いを考察させる。

ア）一次資料のデジタル化資料は，貴重性は高いが難解なものが多く，その内容は児童・生徒にとって高度である。

イ）学習用のデジタル化資料は内容も児童・生徒が取り組みやすいようなものに限定されており易しいが，一定の決まったルートの学習にしか活用できない。また，ほとんどが事実的な知識に関するものである。

ウ）一次資料のデジタル化資料は情報量が多く様々な事実を読み取らせることができるが，学習用のデジタル化資料は情報量が少なく，それを使って考えたり判断させたりするには不向きである。

④ 授業で有効に活用できるのは情報量の多い一次資料をデジタル化した資料であることを確認したうえで，利用上の留意点を理解させる。

ア）読めない文字などについてはあらかじめ資料提供者に問うて明らかにしておくこと。

イ）どうしても不明な部分がある場合は，資料を読み取らせるにあたって視点や角度を限定して，児童・生徒に利用させるようにすること。

ウ）資料についての解説や関連する資料の充実している施設のものを利用すること。

（3）指導上の留意点

学習用のデジタル化資料は，個別学習用に設計されたものが多い。そのため，授業の特性を集団で話し合いながら進めていくものと考えた場合においてはどうしても適さなくなる。

プログラム２－③「デジタル化された資料を使ってどのような授業ができるか？」

（1）目的

このパートでは，デジタル化された資料を有効に活用した授業づくりの演習を行う。

a．デジタル化された資料から様々な情報を読み取ることができる。

b．資料をもとに児童・生徒に対する課題と学習活動を構想する。

（2）展開

① 具体的にデジタル化された資料を提示し，簡単な解説をした後に，その資料からどのような事実を読み取ることができるかを問う。

② 資料について児童・生徒にどのような問いを投げかけることができるかを考えさせる。

③ 資料に基づいて児童・生徒にどのような課題に取り組ませることができるかを考えさせる。

④ 考案した課題について，受講者同士で議論し，最も優れたプランを選出する。

（3）指導上の留意点

可能であれば，課題を考えさせるだけではなく，その課題を含む授業のプランと授業のねらいを考案させてもよい。

Ⅳ．研修プログラムに対する受講者アンケート

受講生に対して以下のような質問によって構成されるアンケートを行い，研修の成果を確認する。

設問１　本日の研修で学んだことの中で，最も印象に残っていることは何ですか。

設問２　本日の研修は，あなた自身の今後の授業改善に役立ちそうですか。

設問３　本日の研修は，あなた自身が抱えていた社会科授業に関する問題の克服に役立ちそうですか。

設問４　今日のテーマ以外に受けてみたい研修内容はありますか。